

現代社会学部公開講座

「国際協力と私 —支援する女性と支援される女性—」

戸田真紀子

公開講座プログラム

- 開催日時 2015年6月6日(土) 14:00~17:00
- 場 所 京都女子大学B517教室
- 講 演 1. 「女性の視点からみた国際協力」 戸田真紀子 (京都女子大学教授)
2. 「東アフリカの国々でのそれぞれのルール」
梶田三佐江
(青年海外協力隊元隊員、キガリ図書館ボランティア職員)
3. 「あなたの善意は届いていますか？」
土方 栄子
(ケニア政府公認NGOミコノ・インターナショナル副所長)

講演の要旨

講演1: 「女性の視点からみた国際協力」

京都女子大学教授 戸田真紀子

国際協力とはどのようなものなのでしょうか。日本のODAのほとんどを担っているJICA(国際協力機構)は、「国際社会全体の平和、安定、発展のために開発途上国、地域の人々を支援すること」だと説明しています。では、

どうして日本が国際協力をしなければならないのでしょうか。JICAは、グローバル化と相互依存という二つのキーワードで説明をしています。以下、JICAのHPの説明を見ていきましょう¹⁾。

1) JICA HP「国際協力とは」<http://www.jica.go.jp/aboutoda/whats/cooperation.html> (2016年4月20日確認)

日本が国際協力をしなければならない理由、その一つ目は、開発途上国の問題は世界の問題であるということです。世界には195の国があります。そのうち150カ国以上が開発途上国です。開発途上国の多くは貧困や紛争といった問題を抱えています。貧困によって衛生事情が悪化し、感染症のまん延や環境汚染を起こす。そして貧困は教育や雇用の機会を奪い、社会不安を招くことから紛争の原因となる。つまり、世界がグローバル化した現在、途上国の抱える問題が、世界規模で環境破壊や感染症のまん延、そして紛争の深刻化を引き起こしています。これらの問題は世界全体を脅かしており、決して開発途上国だけの問題ではありません。

二つ目の理由は、日本が世界に依存しているということです。日本はエネルギーの80%を輸入しています。食料自給率は40%未満です。穀物、水産物、果実に加えて間接的に水を輸入しています。輸入食料の生産には大量の水が使われており、地球上の限られた淡水を間接的に日本が輸入しているといえるからです。

では、国際協力にはどういったアクターが関わっているのでしょうか。市民レベルの国際協力も活発化しています。JICAの草の根技術協力事業の事例を一つご紹介します。これは、最後にお話しして頂くミコノ・インターナショナルがパートナーになって下さったプロジェクトですが、ケニア共和国の当時の北東部州ガリッサ県で実施した、女子高生の中退率を減少させるためのガイダンス&カウンセリング部門の能力向上計画です。

2010年10月からスタートしましたが、翌年ケニア政府が「テロとの戦い」に加わったこ

とによる報復テロで、残念ながら半年を残して中断しました。1年間では次のような成果がありました。まずは、女子校2校に独立したカウンセリングルームを建てました。これによりプライバシーを守りながら相談ができるようになり、相談に来る女子生徒の数は倍増しました。2011年8月には第1回セミナーを開催し、北東部州から約30人の高校の先生方や教育委員会の方々が参加され、ジェンダーを含めて、どういったことをカウンセリングの技術として身に付けないといけないのかについて熱心に勉強し議論して頂きました。

第2回目のセミナーは11月にやろうということで先生方も意欲満々で、私たちもとても喜んでいたのですが、先程申し上げた理由で10月から報復テロが始まり、11月の時点では先生方自身が国内避難民になってしまっただけで連絡が取れないという状況になり、残念でしたが中断せざるを得ませんでした。

さて、どうして国際協力にジェンダーの視点を入れなければならないのでしょうか。国際協力とジェンダーについては、アプローチの仕方もいろいろ変化しています。昔は開発政策とか事業というものは、男性にも女性にも中立であり、男女で異なる影響を与えることはないと考えられていました。第2次世界大戦が終わり、アジアやアフリカの国々が独立していきます。こういった国々をどうやって発展させていくのかを考える上で、この時期アメリカで主流となったのが近代化論という考え方です。

この近代化論によりますと、経済発展は自動的に女性の地位向上をもたらす。女性は開発の担い手ではなく、再生産労働、特に母親としての役割が強調されていました。近代化

の下では、女性は開発の恩恵を受けるだけの存在であり、食料援助や栄養教育、家族計画といった社会福祉的な政策が採られていました。ところが、結果として必ずしも女性の生活を改善することにはつながりませんでした。

その原因を考える中で、女性を開発過程に統合しなければ開発は成功しないというWID（開発と女性）アプローチが登場します。時期は1970年代です。ボズラップという研究者が、第三世界の経済開発は、女性にマイナスの影響を与えているという研究報告をしました。

ボズラップによれば、伝統社会から貨幣経済へと移行する中で、男性がお金になる換金作物を生産するのに対し、女性は見えない労働に従事している。女性は、家族が食べる自給作物を生産し、お金にならない家事や育児に従事する。男性はお金を得る。しかし女性は得ることができない。そういう中で女性の社会的地位が低下していったということを明らかにしました。

1975年の国際婦人年を契機に、国際的に開発における女性の役割が重視されるようになり、ボズラップの研究を理論的支柱としてWIDの理念が生まれました。WIDは開発における女性の役割を重視するのが特徴です。WIDの前提としまして、女性は、経済開発に貢献できるにもかかわらず、これまでなおざりにされてきた有益な資源の一つであり、開発過程に女性たちが完全に組み入れられれば開発はよりよく進むと考えました。

WIDに基づいて女性を対象にした貸し付けとか雇用創出が行われたわけですが、それによって女性の置かれていた状況がよくなったということにはなりません。社

会参加できたとしても、ジェンダー間の不平等な関係が変わらなければ女性の置かれている状況は改善されない。女性のみを対象とした取り組みだけでは、真の問題解決にはならないという異議申立がWIDに対して起こります。例えば、WIDは所得創出プログラムというものを行ったのですが、家父長制の下では、報酬に対する裁量権、経営に関する意思決定への参画、生産手段の所有などに対して、女性は男性と同じ権利を有していません。途上国の女性がどんなに働こうとも、家父長制が維持されている限り、女性の置かれている状況は改善されないということが分かってきました。

こういう状況を何とかしなければならないということが出てきたのが、GAD（ジェンダーと開発）アプローチです。これが1980年代になります。ジェンダー間の不平等な関係を見直さないまま、女性を開発に組み入れるようなプロジェクトは、女性の労働負担を増やすだけである。女性の置かれている状況は改善されないというのが、GADの考え方です。女性のみを対象とした取り組みでは、真の問題解決にはならないということも主張しました。現在はGADから発展した取り組みがずっと続いています。

日本は国際協力とジェンダーの分野で、どのように政策を変更してきたのでしょうか。国際社会ではWIDアプローチは1970年代に主流になりますが、日本では約20年遅れてスタートしました。外務省のHPに詳しく記載されていますが、日本政府は1995年に途上国の女性支援（WID）イニシアチブを発表し、女性の教育、健康、経済社会活動への参加の3分野を中心に支援を行い、女性の開発プロ

セスへの統合に努めるということを行いました。

次の段階です。国際社会ではGADアプローチは1980年代スタートですが、日本政府はこちらも約20年遅れて、2005年にジェンダーと開発（GAD）イニシアチブを策定します。このGADイニシアチブですが、途上国の女性が置かれている状況がよく分かりますので、是非外務省のHPをご覧ください²⁾。

最後に、女性、母親の視点を持つ指導者が登場して、政策が変わった事例として、国連難民高等弁務官を務められました緒方貞子さんをご紹介します。日本政府がWIDからGADに方針転換をするずっと前に、緒方さんは第8代国連難民高等弁務官を務められ、初めての女性難民高等弁務官として画期的な貢献をされました。

UNHCRは、パレスチナを除く世界中の難民を支援する仕事を担っています。緒方さんは女性としての経験、そして母親としての経験から、平和構築において女性を支援するという視点を見いだしました。例えば、「ルワンダ女性イニシアチブ」というのが1997年にできたのですが、女性の能力を向上するために識字教育、農業技術、焼きものづくり、縫製といった収入を得るための活動の訓練を行い、女性の権利についての啓蒙活動を行うと

いったことをされました。

国際貢献と国際協力という言葉の違いについて、緒方さんは次のように説明しています³⁾。「たしかに最近是不景気ですが、日本はれっきとした経済大国です。そのうえで『どうして支援するのか』という疑問がある向きには、こうお答えします。『今の世界も日本も、グローバル化を避けては通れないのです』と。…今まで富んでいた国だけが繁栄を誇るのをおかしいと思うのです。…先進国から途上国への援助について、私たちはつい『貢献』という言葉が無意識に使い、一方向に施しを与えていると思いがちです。でも、グローバル化の視点に立ってみると、その考えはおごりにすぎません。世界はすでに相互に依存し、共存しているのです。だから、『貢献』ではなくて『協力』、なんですよ」と。

緒方さんと同じ気持ちで、本日の公開講座では「国際協力」という言葉をタイトルにしています。国際協力について、世界には素晴らしい理念があり、また各方面で様々なプロジェクトの蓄積もありますが、実際に援助の現場はどうなっているのでしょうか。女性の視点からみた国際協力について、これから梶田三佐江さん、土方栄子さんからお話をさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

2) 外務省HP「ジェンダーと開発（GAD）イニシアチブ」
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/bunya/archive/gad_initiative.html（2016年4月20日確認）

3) JICA HP「特別対談 池上彰×緒方貞子」 <http://www.jica.go.jp/aboutoda/ikegami/07/>
（2016年5月30日確認）

講演2：「東アフリカの国々でのそれぞれのルール」

..... 青年海外協力隊元隊員、キガリ図書館ボランティア職員 梶田三佐江

私が付けたこのタイトルに問題がありまして、「ルール」という言葉を使ってしまったのですが、これは法律という意味ではなくて、慣習とかやり方とか、そういう意味で捉えていただければと思います。

皆さん、アフリカと聞くとどんなイメージを持たれるでしょうか。感染症、古い生活をしている、治安が悪い、運動に強い、これらの事をご想像されると思います。

これらの写真（ブルンジでのクーデター関連の写真紹介・雑誌Independentより）は報道されるアフリカです。この写真は、最近のブルンジからルワンダへ避難した人々の難民キャンプの写真です。この写真も最近のブルンジで起きたデモに対する警官の様子で、皆さんの目にはこうしたアフリカが、テレビを通して映ると思います。この写真（民族衣装の写真・話者撮影）もよく見るアフリカですね。実際には日本人の着物と一緒に、彼らはこういう着物で生活しているわけではありません。キリンの写真です（話者撮影）。ルワンダの場合、キリン・ゾウ・ライオンを様々な国から全部もらってきてつくったサファリがあります。ライオンは昔はいたそうですが、村のウシを襲って食べてしまうので、村人がみんなでライオンを捕まえて、絶滅したと言われていています。

（世界地図）世界の大陸です。アフリカはここです。アフリカに行かれたことがある方はいらっしゃるでしょうか。ちらほらと。ありがとうございます。日本から行きますとヨーロッパ経由、もしくは中東経由が主な航空

ルートです。

皆さんのお手元に東アフリカの地図がありますが、北がケニア、その南がタンザニア。少し大きいのがウガンダ。小さい方の北側がルワンダ、南側がブルンジになります。地図を見ていただけると分かるのですが、ケニアの大きさが日本の2倍ぐらい。タンザニアは日本の2.5倍。左上のウガンダが本州と同じぐらい。ルワンダとブルンジが四国の1.5倍ぐらいの大きさになります。

この5カ国で東アフリカ共同体を構成し、政治、経済、文化などの交流を行っています。また、関税を安くし、5カ国に所属する人たちはビザを取得しなくても国境を行き来できるように制度化を進めています。

〔東アフリカ共同体について レジューメより〕東アフリカ共同体（EAC）は、ケニア・タンザニア・ウガンダ・ルワンダ・ブルンジの5カ国が加盟する地域共同体です。地域統合を目指した関税同盟・共通市場・通貨統合に向けて活動を実施しており、いずれは政治連邦を形成することも念頭においています。（JICAホームページより）

2001年 発足（ケニア・タンザニア・ウガンダ）

2007年 ルワンダ・ブルンジが加盟

共同体は1967年ごろにあったのですが、国同士の戦争や、関係が悪くなったりで1回解体しています。新しくまた2001年に発足しました。2007年にルワンダ、ブルンジが加盟しました。ケニア・タンザニア・ウガンダは元イギリス領、ルワンダ・ブルンジは元ベル

ギー領です。公用語が英語とフランス語に分かれていました。その為、ルワンダは2010年から学校の教科書が英語中心になり、社会も急に英語中心になりました。そのことによって、フランス語しか勉強してこなかった人の就職が難しくなっています。

日本は、東アフリカ共同体がもっと活性化するように、国境で橋をつくるプロジェクトを行っています。橋と道路は完成しています。(ルスモ国際橋の写真・話者撮影) この事務所のオペレーション、例えば荷物の検査、税金の計算などの訓練を現在行っています。ワンストップ・ボーダーポストといいまして、東アフリカのそれぞれの国境につくられていて、タンザニアとルワンダの国境で日本は無償資金協力をしています。実際にこの橋がつくられる前は、橋を渡るまでに2週間かかっていたのです。今はこの検査もスムーズに行われて、この黄色い橋も実は、昔フランスが40年ぐらい前につくった橋なのですが、ひび割れています。車が渡ると揺れるような橋でした。日本が新しい橋をつくりまして、いまは何台でもトラックが通れるので、交通がスムーズです。タンザニア側とルワンダ側に事務所がありまして、いままでは2カ所、両方の国で検査を受けてから通っていました。その間にみんながガス欠を起こして、この辺にずっとたまっているという状態だったのですが、検査が1カ所になり、橋も丈夫になったということで、スムーズに橋が渡れるようになっていきます。

各国概要をご覧ください。ここで注目していただきたいのは、特殊なブルンジとルワンダの異常な人口密度の高さです。(km²あたりの人口密度 最新データ・ケニア78・タンザ

ニア56・ウガンダ188・ルワンダ477・ブルンジ396) これによって何が引き起こされるかといいますと、人々の畑が非常に小さい面積であるということです。ケニアは人口密度もそんなに高くなくていいではないかと言われるのですが、ケニアの場合、北側の地域は干ばつ地域であったり、洪水が起こったり、農地にはあまり適さない、努力が必要な土地が多いのです。

日本はGDP世界3位です。GDPを人口で割ったのが一人当たりGDPです。数学が好きな方は計算されるかもしれないのですが、途上国のデータというのは、今年あたり去年あたり、なかつたりするもので、厳密にこれを割ったらこれになるとは限らないのですが、目安だと思って下さい。

ブルンジでクーデターが起きました。未遂に終わりましたが、ブルンジはルワンダと国土の面積にあまり差がありません。(国土面積(km²):ケニア569,140・タンザニア885,800・ウガンダ199,810・ルワンダ24,670・ブルンジ25,680) ルワンダとブルンジは同じ時期に内戦がありましたが、これほどまでに一人あたりGDPに差が開いてしまって、大統領は何をしているのだということから不満がつのり問題が起こっています。

先ほどの人口密度ですが、ルワンダの場合(ルワンダの畑の写真・話者撮影)、日本に似ているのですが、ものすごい段々畑です。これが山の頂上まで続いています。ほとんどの山がこんな感じですが、私も何度か登ったことがあるのですが、2時間近くかかります。おじさんたちは畑を耕してパイナップルを20個ぐらい背負って、また降りてくるのです。この山にケーブルを付ければいいのではないかと

という意見もあるのですが、山が無数にありますのでケーブルを付けるお金もないのです。この辺がルワンダの問題だと思います。

こちらは人口密度の低いタンザニア（タンザニア、タボラ州の畑の写真・話者撮影）です。ここを見ていただくと分かるのですが、黒くなっています。焼き畑です。タンザニアは国土が広くて田舎に行けば行くほど誰も耕さないで、そこを開墾して、木を燃やして焼き畑をします。肥料を持って行かなくても肥えた土になるので、耕して何か育てる。そこがまた、土が枯れてくるとどこかを耕して燃やしていく。その結果サバンナみたいになってしまっています。

各国GDP、ケニアが一番高くブルンジが一番低いです。貧困者比率、どのぐらいの割合で、1日1.25ドル以下の収入、もしくは所得のある人がどれだけいるかということです。

	一人あたり GDP (2005 US\$)	貧困者比率 (1.25\$)	貧困ギャップ 指数 (1.25\$)
ケニア	632.4	43.37	16.91
タンザニア	487.3	43.48	12.98
ウガンダ	417.7	37.78	11.96
ルワンダ	401.2	63.02	26.53
ブルンジ	155.2	81.32	16.91

昔よく聞いた、1日1ドル以下で暮らす人々が、最近世界の物価が上がりましたので1.25ドルになりました。貧困ギャップ指数、あまり聞き慣れないと思うのですが、1日1.25ドルから離れている人が、どれだけ離れているかということで、この数字が大きいほど、貧困者と言われる人たちが、どれだけ深刻に貧困であるかということが分かります。一応途上国も少しはよくなっているというこ

とをご紹介したかったのです。一人あたりGDPの変化ですが、右肩上がりではあるということですが。

レジュメには、乳幼児死亡率と栄養失調のデータを載せています。ここはまた別の、平均余命についてのデータを載せています。(2010-2014 (才): ケニア62・タンザニア61・ウガンダ59・ルワンダ64・ブルンジ54) グラフの数値が下がっているのはジェノサイド、虐殺があったからです。しかし順調に寿命は延びています。実際にアフリカに行きますと、かなり高齢のおじいさんやおばあさんが大勢いるので、みんなが50歳前後で死んでしまうのではないのです。ただ、乳幼児死亡率が非常に高い。2005年では千人当たり100人亡くなってしまおうという悲しい現実もあります。ちなみに、日本の数字は千人当たり3.5人となっています。(5歳以下乳幼児死亡率 1000人あたり 最新データ: ケニア70.7・タンザニア51.8・ウガンダ66.1・ルワンダ52・ブルンジ82.9)

ここからジェンダーの話をさせていただきます。先ほどの戸田先生と内容が似ているのですが、私はまず、経済の成長が大事ではないかと。経済が成長すると家に入るお金が増えます。家に入るお金が増えたら、少しいいものを食べようか、少しいいものを着ようか、または子どもを学校に行かせようかという気持ちになります。

そうすると、男の子だけしか行かせなかったおうちも女の子に教育をということになりますね。女性の教育がよくなると生活の質は向上します。または、女性も賢くなって、理不尽な男性の欲求とか暴力に抵抗できるようになります。

女性たちが社会に参加すると、女性の労働力が加算されます。そうすると人口の多くの人が働くようになるので、その国の経済は成長するということです。

補足ですが、先ほどの家が豊かになったら中学校の入学率はどうなるか。中学校と聞いていますが、アフリカではセカンダリースクールといまして、これはセカンダリースクールの中学校の部分なので、中学校という文字を使わせていただいています。(中学校入学率最新データ 女/男 全生徒に対する%：ケニア64.5/69.5・タンザニア31.6/34.3・ウガンダ25.0/28.7・ルワンダ33.7/31.4・ブルンジ29.2/37.2) 1975年時点では、男女比は少し差が、ルワンダ以外ありました。しかし、最新のデータを見ますと、女の子にも教育を受けさせようと親たちも考えるようになりまして、だいぶ格差は狭まっています。このようにアフリカもずっと遅れているわけではなくて、アフリカ自身も頑張っているということです。ただ、中学校入学率は高いのですが、高いといっても低いのですけれども、その中でも問題なのが卒業率です。これはまだ低く、30%ぐらいの人しか入れないのに、さらに卒業できる人が30%ぐらいだという。一体何人入って何人卒業できるのだという感じなのですが、理由は、家にお金がないから卒業できない、もしくは勉強について行けないから卒業できないというのがほとんどです。

今まではデータの話だったのですが、ルワンダの話に移りたいと思います。ルワンダにおける女性の環境改善への取り組み。ルワンダは昔から王様を中心に栄えてきた国です。といいまして、王様が住んでいた地域から遠いところには統治が及んでいなかったの

ですが、文化としてそういうものが残っています。

各村には、日本でいうと字とか小字になりますが、その単位でウムドゥグドゥという集まりが存在します。政府が主導をしていますが、いわゆる町内会です。毎月月末の土曜日の午前中に、みんなでお掃除をし、その後政府の通達がありまして、地域の問題解決や通達などのお話をします。

私も参加しているのですが、例えば、私の隣の家の下水が詰まり、うちに雨の日に水がどんどん流れてくるが、自分では何度交渉しても問題が解決しない時がありました。そういうときもウムドゥグドゥに隣の家との問題をどうしたらいいのかと相談をしました。そうするとウムドゥグドゥのチーフが動いて問題を解決してくれたことがありました。そんなふうにルワンダの場合は、みんなで話し合いをして、それが愚痴大会にならずに解決に向かおうという文化があります。

女性だけの話し合いというものもありまして、小高い山があります。その山の斜面(畑)に女性が集まりまして、例えば「私の夫は全然働かないの。」「私が売った野菜のお金を全部取り上げてしまの。」という相談します。そうしますと、村の地位の高い女性が、これはいかん。どうにかしようといって、家の現状について話し合いをします。続いて夫を呼び出して、なぜあなたは働かないのか。ここに仕事があるから行きなさいというようなアドバイスをします。女性には、お金を現金で持つのではなくて、ちゃんと銀行に入れなさいとアドバイスをします。これは特別ではなく、日常で話し合いでの解決が行われています。

また、コーペラティブ(協同組合)という

ものをつくりまして、野菜が沢山つくれる人と少ししかつけれない人。少ししかつけれない人は市場に持っていっても、あまり小売りのお店が買ってくれないのです。その為に野菜をみんなで集めて売りに行くという制度があります。

最近ルワンダの国内でも日本の民生委員のような人がいまして、その人たちが村を回って、例えば赤ちゃんに牛乳を飲ませるのにも、ウシから採ったばかりの牛乳は飲ませたら駄目ですよ。ちゃんと1回沸かしなさいね、という指導もしています。

しかし、一番大きいのは男性の意識の変化ではないでしょうか。いまの大統領は内戦後、女性の閣僚を大量に採用しまして、世界で一番、女性の国会議員の数が多い国がルワンダなのです。ちなみに日本は世界で71位だそうです。少し悲しいですね。ルワンダは、社会の方からも女性の雇用を進めているというのがあります。

また、大統領夫人が自ら学校の巡回を行い、ラジオやメディアなどで女性、もしくは女の子に教育を受けさせましようと呼びかけています。「女の子は次の世代を育てるお母さん

になる人ですから、女の子に教育をしないと国はよくなりませんよ」という指導をしています。

最後に国際協力に関する、それぞれのルールについて、私なりに考えるところを挙げさせていただきます。

- ・支援は一方的なものではなく、相手のニーズを取り入れたものでなければならないが、その主導は現地の人が行うのが良い。

- ・新しい取り組みに積極的な国民性とそうでない国民性がある。支援はそれを考慮した上で取り組まなければならない。

- ・現状の課題のみに囚われるのではなく、今日までの取り組みを評価し、効果的であった手法を更に広げることが大切である。

- ・長期的視点で取り組む必要がある。

もっと沢山お話したいことがありますが、時間の都合で終わらせていただきたいと思います。本日はありがとうございました。

*全てのデータは世界銀行データベースを使用しています。

講演3：「あなたの善意は届いていますか？」

…………… ケニア政府公認NGOミコノ・インターナショナル副所長 土方栄子

初めてケニア、ガリッサを訪れたとき、乾燥した大地に遊牧民、ラクダや牛、ヤギなどが一緒に歩いていて、子どもたちがたくさん近寄ってくるのですが、目には目やにがいっぱいで、そこにハエがたかっており、テレビで見たことのあるアフリカのイメージとぴったりの光景が目の前に現れてきました。水の

ない、電気がない、食べものも不足しており栄養状態の悪い人たちが大勢いました。それを見て、私に何かできる気がするかと実感し、救援活動に参加することにしました。

ガリッサはケニアでは少数民族のソマリが住んでいます。ソマリはソマリアの民族と同じで言語も宗教も生活様式も似通っています。

というのも植民地政策で国境線が引かれるまでは一つだったのです。植民地になってからは、それぞれの国の政策によって少しずつ文化の違いができました。ケニアのソマリはイギリスがガリッサに興味を持たなかった為にほとんど放置されました。学校、病院、商業計画などありません。そのため他の地域から全てにおいて立ち遅れました。ソマリ語しか知らない昔ながらの生業を続けていたのです。その頃、干ばつによる被害が大きく、栄養失調の子どもがたくさんいました。5歳未満児死亡率も高く、肺炎、マラリア、下痢など治療を施せば治る病で亡くなっていました。緊急支援には国際的に活躍しているケア・インターナショナル、国際赤十字、国境なき医師団などが時折やってきました。ソマリア難民を受け入れるUNHCRやWFP、ユニセフなどの拠点もありました。そうした地域で私たちは草の根レベルの活動を続けてきました。

まず、このミコノという名前ですが、スワヒリ語で「手」(の複数形)を意味します。一方的に手を差し伸べるというのではなく、お互いに汗を流して助け合いをしましょうという意味合いがあります。

私たちの活動は、学校建設から始まりました。学校が足らなかったので子どもたちが木の下で勉強していました。親たちは遊牧民で一か所に留まっていなかったため子どもたちは落ち着いて勉強もできません。そもそも親たちはソマリ語しか話すことができず、生活の改善を試みることもあまりせず、読み書きができないために世間に疎く、文化的生活を望むことも難しい状況でした。また、家畜と子どもの薬を間違え子どもを死なせてしまった事故もあり、いかに教育が必要かということに

ついて、親たちにも感じる場所があったのです。

学校建設から始まり、備品である机や棚、教材に至るまでいろいろと支援をしました。義務教育といっても制服代、運営費(水代、薪代、ワーカー代)、PTA費、学校改善費などかかってくるため学校に通える子どもは3割もいませんでした。更に女の子に教育を与えようとする親は少なく、通えても途中で退学させられることがほとんどでした。ですので、ミコノでは特に女の子の教育に力を入れてきました。

なぜ、女の子なのかというと宗教的にも民族的、慣習的にも虐げられていたからです。女の子には経済的自立は難しく、結婚にもほとんど自由がありませんでした。一夫多妻で裕福な家に3番目、4番目の奥さんとして嫁がされることが多かったのです。女の子の仕事は男から見れば子どもを産み育てることが一番大事な事でした。医療施設に頼らず不衛生な環境の中、マニヤッタという藁小屋での出産、あるいは移動中の砂の上での出産もあり、出産時、出産後の母親の死亡率もかなり高いものでした。私たちは女の子に教育を与え、手に職をもち自由に恋愛して結婚でき、夫に収入がなくても夫と別れても自分や子どもを守れる力を持ってもらいたいと思いました。

私たちは沢山の学校を建てましたが、とりわけ女子小学校を建てたことは、女子教育において大きな発展につながったと思います。というのは、女の子の退学率を下げることができましたし、進学する割合が高くなったからです。また、女の子たちが医療関係者や学校の先生など、手に職をもち、社会で活躍するようになると、その子たちに憧れて勉強し

たがる女の子が増えて、親たちもそれを認めるようになりました。

初等教育しか受けられなかった子や中途退学してしまった女の子たちにも、ミシン教室を開いたりして技術を受けられる場を作りました。成績が優秀でも貧しくて進学できない子どもには日本で里親になって下さる方や団体を探し、進学ができるようにしました。こうして高校や大学、専門学校などで学んだ子たちが今は、弟や妹の学費を支援し、親を助けています。奨学金支援で育った男女生徒の中には市長、村役、弁護士なった子もいて、ガリッサ地域の人々に大きく貢献しています。

私たちが嬉しいのは、子ども達の笑顔であり、成長した姿を見ることができたときです。教育支援の成果を見ることができたのも20年以上、この地域に関わってきたからなのだと思います。

教育支援の他には医療支援、環境整備として植林や井戸掘り、太陽光発電の設置、緊急支援として食糧配給や水配給、医療巡回なども臨機応変に行ってきました。こうした取り組みができたのは、最初の10年間くらいは郵政省ボランティア貯金の支援が大きかったこと、外務省の草の根無償の恩恵にもあずかりました。また、ミコノ・インターナショナルを支えて下さった会員と協力団体、日本だけでなくケニア政府、UN関係、フランス、スペインなど他国のNGO団体、イスラムやキリスト教などの宗教団体、ケニア人やケニアで出会った多くの方々の協力のお陰です。

講演タイトルである「あなたの善意は届いていますか？」について話を進めます。皆さんは募金や何かの支援の為のイベントなどに参加されたことはありますか？ 実際、募金

や寄付金がどのように使われたか考えた事があるでしょうか？ 日本人は真面目で善人が多いのであまり疑ったりはしないと思うのですが、私が活動していたケニアではいろいろと考えさせられることが多く、信じられない事も多々ありました。そうした体験をお話したいと思います。

寄付金の行方ですけれども、団体によって全く違うのですが、ある大きな団体では届いた援助金のうち、6割が宣伝費や広告費などに使われて、3割は人件費に、1割が現地の人たちのために使われていると聞きました。

大きな団体になってきますと、いろいろとプロセスが長く、例えば、現地に病院を建てましょうということでも、その病院を建てるためにいろいろ調査したり、書類を書いたり、会議にかけたり、承認を得たり、建築材料を選んだり、建築業者を選んだり、そしてその一つ一つにも何人もの人たちが関わって、協力を得られなかったり、不正が発覚したり、談合があったりで時間がとてもかかります。そうした間に現地の状況が変わったり、人事異動があったりして、やり直しをしなければならないこともあります。

私たちの事業では、そのようなプロセスはほとんどないのですが、それでも実際に病院が建つまでに見積もりや設計のやり直し、現場サイトでのめごととは必ずと言っていいほど発生します。もちろん一般の企業でも日本でも当然あることなのでしょうが、現地ならではの貧困による窃盗、全く説得力のない妨害は、「この土地に先祖の墓がある」とか、「地域の住民を雇わないと作業させない」、「ラマダンなので仕事は午前中だけに」等々、枚挙に暇がありません。

そうした予想外の展開で時間もお金も余分にかかってきます。大きな企業や団体はそうしたお金も予算に組み込んでいるでしょうが、私たちのように小さい草の根レベルの団体は、ゆとりがないので現地の人たちと真正面からぶつかって解決していくしかありません。その結果、大変でも関わっていく密度が深まりますので現地の人たちとの信頼関係を築くことができ、同じ失敗を繰り返さないように先手を打つこともできるようになりました。

私たちとは違う大きな団体は、そういう意味では問題が起きるたびにお金で解決することが多く、小さい問題は放置しがちなので現地の人たちのためには良くないと思いますし、私たちが活動しにくくなることもあります。簡単に言えば、無駄なお金が使われていると考えてしまいます。

去年ある大学が国際協力を勉強していました、実践事業として学生たちが水の援助をしました。最初はライフストローという、吸うだけで汚染された水がろ過されてきれいな水に変わるというものを集まった寄付金で購入し、ケニアの村人に贈呈したいという提案でした。けれども、ちょうどそのときに井戸を掘ってほしいという村人からの訴えがありまして、世帯数は59世帯ぐらいあるのですけれども、300人ぐらいが住んでいて、そこで畑をし始めたのですが雨が降らないし、貯水池が涸れてしまって作物が育たなくて、井戸があれば生活も助かるし、作物が育って生活が豊かになるので井戸を掘ってほしいという依頼がありました。

ライフストローは本数も限られるし、もらう人数も限られて使える回数も決まっています。ろ過するものより水そのものを必要とし

ているから、井戸の資金を集めてくれないかとお願いをしたら、「頑張ってみる」と学生たちが承諾して下さいました。しかし思うように募金は集まりません。最低20万円が必要でした。

そんな時、他の大学生から「ボランティアに行きたいんですけど」というメールが入ってきました。その学生がまた、「そちらに行くまでに何かできることはありますか?」と聞いてきましたので、井戸掘りの話、募金をしてもらっているがまだ足りていないので協力してもらえないか? という旨を伝えると快く了解してくれ、その学生の大学でも募金を集めて下さいました。また、その大学に関係している病院からの協力も得られて予定より3万円も多く寄付金が集まりました。そうして井戸掘り資金を持ってケニアに来て下さって、学生自らつるはしをもって井戸を掘ってくれたのです。その模様はFacebookなどで逐一日本に写真や現場状況を報告することができました。

全部完成したのは学生さんたちが帰った後になるのですけれども、住民300人と隣村の人たちもまたその井戸を利用することができて喜んでいます。1つの大学の学生たちの善意が大きな力となり、ガリッサの村人たちを救うことができました。この話は、善意を生かすことのできた成功例です。

次は学校の釜の話ですけれども、これは少しの薪で煮炊きのできる省エネタイプの釜です。時々、煙突のすす払いをするだけでよいという優れものです。この釜を贈呈する前はというと、石を三つ置いただけの上に鍋を置いて料理していました。そのため使う薪の量は相当な量で、薪が手に入らないと学校給食

も中断されていました。薪を買うお金は学校へ通わせる親が払っていました。そのお金を払えないと学校へ通えなくなります。

ある団体が、学校にガス式の釜を寄付しました。学校中大喜びだったのですけれども、ガスがなくなってしまって、それ以降使われず、立派なガス釜の横に石を三つ置いて、前と同じように給食を作っているという状況に出くわしたことがありました。これは一方的な援助の例です。その学校の村ではガスは手に入らず、購入する手段も思いつかないほど何もないところだったのです。

また、その団体は水洗トイレも作ってくれたそうですが、タンクの水がなくなったら、それで終わりになりました。その後、その団体は一度も問題を解決しようとか、本当に援助が有効だったのかなど様子を聞くこともなかったのです。せっかくの資金が無駄になってしまいました。

ある団体は、干ばつの被害によって財産である家畜を失い、援助を求めて地方からガリッサタウンに集まってきた被災者を対象にトイレを100個作りました。どのようなトイレかといいますと、穴を掘って蓋をただけのものです。彼らは遊牧民で決まった場所に長く住む習慣がなかった為、定まった場所でトイレをしませんでした。その団体は衛生面を考えて計画したのだと思うのですが、実行した人が建設に素人だったのか、資金が少なかったのか分かりませんが、穴を掘る作業は住民たちに掘らせました。しかし、穴の大きさ深さはまちまちで穴を塞ぐ蓋が安全に乗せられて用を足すときに崩れたりしないかどうか不安定でした。ほとんどの人たちは、そのトイレを怖がって使いませんでした。それこ

そ安全でしっかりしたトイレを数個作った方がましだと思いました。

あるNGOが食料配給をしていました。ガリッサの町から180キロぐらいのところに10トン車でメイズ（白いトウモロコシ）と食用の油を運んでいたのですが、2回に1回はそのまま持ち帰ってしまい、NGOの職員と村長が横領していました。その事実は村の人々が皆知っていましたが、長年にわたって続けられていました。

またある団体が、5歳以下の子どもたちの栄養調査を行い、オートミールを配給しました。これは私たちも委託されてガリッサの奥地に回ったのですが、栄養失調の子どもだけにしか配られないので辛い気持ちになりました。そのオートミールというのはケニアでも購入できるものを使えば新鮮で安く手に入るし、ケニアにお金が落ちるので喜ぶと思うのですが、わざわざアメリカから船で運んできたもので高値、しかも古くなって捨てなければならぬものもあり、同じ援助でもずいぶん心無いものだと考えさせられました。

難民キャンプの国連スタッフの生活についてもお話しましょう。私たちのところにボランティアに来ていた女の子が、ちょっとしたきっかけで難民キャンプを見に行っただけですが、そのキャンプの職員さんの生活ぶりが、食べものは豊富で、バーとかパーティーとかディスコがあって、「ここはどこ？」というようなすごい施設でした。ぱっと外を出ると、見慣れた貧しい人たちの生活で、そのギャップがつかないという話を聞きました。

国連となると、もちろん援助する側の職員さんたちの安全とか生活はちゃんと確保され

ているということで、当然のことなのでしょうけれども、私たちは貧しいNGOですので、すごいなとちょっとうらやましいような、寂しいような感じでした。そういったことが実際にはあるということです。

皆さんは、どうしたらいいのかということなのですけれども、国際協力に関わるということは、まず気持ちです。関わりたいという気持ちが大切だと思うのです。自分は何も取りえがないとか、手に職がないとか、そういうことではなく、そこの人たちのために何かしたいという気持ちが必要で、その気持ち一つで、やろうという人たちが寄ってきて、どうにかしようというお金が集まってくるのです。そういう奇跡の連続で、私たちは今までNGO活動を続けてきました。もちろん厳しいときもありますけれども、人のために何かをするということが、どれだけ私たちの心を豊かにするかということです。

グローバル化という話ですけれども、世界はみんな一つだと思うのです。日本とケニアはまったく違うような気がすると思うのですけれども、人はみんな同じで、助け合って生きていくようにできていると思うのです。私

たちは援助をしてきたと言いますが、実は私たちは援助されている、助けられてきたと思うのです。助け合うというところに国際協力、グローバル化が進んでいくと思います。

なぜ女性の支援が大切かというと、まず家族ですね。家族を守る。家族が安全で温かいくつろげる場所であれば、子どもたちは立派に成長しますし、お父さんも稼ぐために頑張って、会社に行って儲けてきます。その単位がたくさん集まって村になり、地域になり、国になり、世界になっていくと思うのです。

その一つ一つ、家庭を守る女がしっかりしていれば、グローバル化がどんどん広がり、貧困は減っていくのではないかと思いますので、皆さんもぜひ、女性であることを強みに、できることを何かやっていただければうれしいなと思います。

ありがとうございました。

休憩時間に沢山の質問用紙を出して頂きました。紙幅の関係で質疑応答の内容を掲載できませんが、皆様のご来場に厚く御礼申し上げます。
(戸田真紀子)